

常設展 〈2024年7月－9月〉 作家・作品解説

展示室 2

“みかた”のちょっと多い常設展

Rather Many Ways for Experiencing Collection Exhibition

歌い、踊る、色と形

ワシリー・カンディンスキー

《小さな世界Ⅱ》《小さな世界Ⅴ》《小さな世界Ⅺ》

まるで音楽が聞こえてきそうな自由な線と鮮やかな色彩によって構成されています。出品されている作品は、リトグラフ、木版、ドライポイントといった、それぞれ異なる版画技法が使われており、その質感の違いによっても奏でられるハーモニーが変化しています。

ワシリー・カンディンスキー（1866～1944）はロシアのモスクワ生まれ。モスクワ大学で法律と経済学を学んだ後、1896年に本格的な絵の勉強のため、ドイツ・ミュンヘンに渡航。1900年代後半から、形と色が共鳴するような抽象的な絵画を描きました。

飛ぶ夢は楽しい？ 怖い？

ジョナサン・ボロフスキー 《飛ぶ夢を見た》

空を飛ぶ男が、身体の進む方とは逆、つまり鑑賞者側に振り返っています。その眼下には、雄大な山脈が広がります。ラフな服装、それに裸足で、空に浮かび上がった男の表情は何を物語るのでしょう。ジョナサン・ボロフスキー（1942～）は、アメリカのマサチューセッツ州生まれ。巨大なパブリックアートの仕事などで知られる彼は、自身の夢を題材にした作品の制作も行ってきました。本作品もボロフスキーの夢がモチーフになっています。その中でも飛ぶ人間は重要なモチーフで

あり、本作の他にもドローイングやインスタレーションなど表現方法を変えて何度か表現されています。

大きくて、ざらざら

武田 浪 《どでかい》

三重県伊賀市周辺で採取される伊賀土^{いがつち}を使って制作された大胆なデザインの大皿です。中央を横断するように力強くひねり上げたウネリが走り、釉薬^{ゆうやく}を用いず焼いた表面は土の質感がダイレクトに伝わるざらざらとした触り心地です。武田浪^{たけだろう}（1942～2017）は大阪府生まれ。大学卒業後に陶芸家^{あずまけん}の東憲に師事し国内外で活動を展開しますが、やがて滋賀県大津市の近江舞子にアトリエを構え、各地で個展を開催。伊賀や信楽、沖縄などの土を使用し、大皿や壺、インスタレーション作品など幅広く手掛けました。

エレガントな線

アンリ・マティス

《パーシパエーミノスの歌（クレタ島の人々）》

黒字にくっきりと刻み込まれた白い描線で、人物や動物の姿が描かれています。タイトルになっているパーシパエーとは、ギリシャ神話に登場するクレタ王ミノスの妃で、雄牛に愛情を抱き、牛頭人身の恐ろしい怪物ミノタウロスを生んだ女性です。アンリ・マティス（1866～1954）は、フランス北部のカトー=カンブレッジ生まれ。鮮やかな色彩と大胆な対象のデフォルメを特徴とする「フォーヴ（野獣派）」のリーダーの一人として知られています。本作は、リノリウムを彫って版にするリノカットという版画の一種です。緻密な描写には不向きなりノカットですが、マティスはこの素材を活かし、いきいきとした線で対象を描き出しています。

遠くを見つめる眼差し

舟越 桂 《Quiet Summer 1》

どこか遠くを見つめる瞳は、詩的なタイトルと相まって、豊かな詩情を感じさせます。ソープグラウンドと呼ばれるクリーム状の石鹼を筆で版面に塗る技法により、繊細な陰影が描き出されています。舟越桂（1951～2024）は岩手県生まれ。静謐な雰囲気を含めた木彫像でよく知られます。版画を制作しはじめたのは、新進の彫刻家として注目を集めるようになった1987年頃のことです。1990年には、サンフランシスコの銅版画工房クラウン・ポイント・プレスにて10点に上の版画を制作。以後、彫刻やドローイングと並行するように、銅版画作品の制作は続き、舟越の表現世界の重要なピースとしてあり続けました。

振り返っても、この親子はいません

高松 次郎 《影（母子）》

白く塗られた板の上に子どもを抱えた母親のシルエットが浮かび上がり、板の上を縦横に走る棧のところだけ影が歪んでいます。影のみが描かれることにより、むしろ実体が「ない」という状況が際立ち、鑑賞者は不在と向き合うという逆説的な体験を得ることでしょう。高松次郎（1936～1998）は東京都生まれ。1962年に中西夏之、赤瀬川原平と「ハイレッド・センター」を結成し、数多くのハプニングを実施しました。1964年には、代表作となるシリーズ《影》の制作を開始します。1968年の第34回ヴェネチア・ビエンナーレ、1977年のドクメンタ6など、世界中で活動を行いました。

毎日の風景

塔本 シスコ 《夕食後》

室内で過ごす男女。部屋は、奥の壁側の障子や家具が画面上部に描かれ、その下には床が俯瞰視点で描かれています。ここではいわゆる透視図法（線遠近法）は無視

されるとともに、部屋を構成する諸要素が画面を彩るものとして描かれているのが特徴的です。^{とうもと}塔本シスコ（1913～2005）は、熊本県生まれ。自身のサンフランシスコ行きの夢を託した養父により、シスコと命名。1966年、53歳のある日から、大きなキャンバスに油絵を描き始め、身のまわりの植物、愛育している金魚などをモチーフとして、亡くなる前年の2004年まで旺盛に制作を続けました。本作は、彼女の最初期の作品であり、娘の和子とその夫が部屋の中で過ごす様子を描いたものです。

言葉にできない感覚を線に

岡崎 莉望 《目》

水色の紙に、白い線が幾重にも走っています。有機的な動きが感じられる線からは、植物の根や粘菌、神経細胞などを連想できます。画面全体に繊細な印象が漂いますが、それは作者が一定の速度で画面上に線を引くことで生まれるものです。^{おかざきまりの}岡崎莉望（1988～）は愛知県生まれ。現在は北海道で活動しています。2013年頃より、線を何度も重ねて引く抽象的なドローイングを制作し始めました。岡崎にとって絵は、言語では説明できない感覚的な部分を表現するための手段であると語っています。

おごそかな線の反復

李 禹煥 《線より》

画面いっぱい、垂直の線が繰り返し引かれています。本作のタイトルでもある《線より》は、作者の^{リ・ウファン}李禹煥（1936～）を代表する作品シリーズの一つです。同シリーズは、さまざまな技法や素材で作られています。本作は版画の一種であるシルクスクリーンの技法を用いて作られています。李は、韓国慶尚南道生まれ。1956年に来日し、哲学を学び、1960年代末には、作品と理論の両面で「もの派」を牽引します。近年は、フランスのヴェルサイユ宮殿など世界各地で個展を開催していま

す。2001年には高松宮殿下記念世界文化賞を受賞しました。現在は、鎌倉とフランスのパリに拠点を置いています。

この線は「モーター付自動線引機」によって引かれています

金山 明 《Work 1961》

青く均一な線と、画面をはみ出すかのように描かれた黒の線。これらは、絶えず絵の具が滴り落ちるように細工されたエナメル缶を車輪付きの板の上に載せ、乾電池をつけた手製の「モーター付自動線引機」の軌跡による描線です。金山明（1924-2006）は、兵庫県生まれ。1952～1954年頃、白髪一雄らとともに「0会」を結成。1954年には吉原治良を中心に結成された「具体美術協会」（通称「具体」）に参加しました。1950年代に、本作で使われたモーター付自動線引機やおもちゃの車に線を引きさせた絵画を発表し、絵画の領域に無機質な機械を持ち込んだ先駆的な仕事として紹介されました。

広がる青空と麦畑

野口 謙蔵 《五月の風景》

鮮やかな群青の空のもと、緑豊かな麦畑が広がります。画面をほぼ二分割するように空と地面がくっきりと描き分けられる大胆な構図で、その境界線上には、全体を引き締めるアクセントのように民家と鯉のぼりが描かれます。野口謙蔵（1901～1944）は滋賀県生まれ。東京美術学校（現在の東京藝術大学）西洋画科で和田英作に師事し、卒業後は故郷に戻ってアトリエを構えました。そして生涯愛する地元、蒲生の風景を描き続けました。

たゆたう形、いつかの風景

アーシル・ゴーカー 《無題 [バージニア風景]》

植物や昆虫、人体の断片などを思わせる有機的な形が、浮遊するかのよう描かれています。輪郭線と色彩が一致していないので、画面全体を通して流動的で変化しているように見えることでしょう。アーシル・ゴーカー（1904～1948）は、当時トルコ領だったアルメニア生まれ。15歳の時にアメリカにわたり、ボストンのニュー・スクール・オブ・デザイン、ニューヨークのグランド・セントラル美術学校で学びます。1930年代にシュルレアリスムの影響を受けたことや、1941年の結婚を機に、コネティカット州やバージニア州の農園を訪れるようになり自然を観察したことが、彼の作風に影響を与えたとされています。

きっと世界一の交通渋滞

古久保 憲満 《オレゴン州の町》

世界中のランドマークとなる建造物やネオンが光る高層ビル、鉄道や車、発電所や家電量販店、刑務所や軍事施設、誰もがよく知るキャラクターなどが、空白を埋め尽くすかのよう描かれています。古久保憲満（1995～）は、滋賀県生まれ。古久保は現実世界と空想世界の交錯から成る都市を紙の上で創り続けています。都市に興味を抱いたのは、養護学校中学部の頃に従兄弟から借りたゲームの世界のなかで、街を開発するようになってからであるといいます。2019年には、ドキュメンタリー映画『描きたい、が止まらない』（近藤剛監督）が公開されました。

画家は円に向き合った

吉原 治良 《無題 71》

赤の下地に、大きな青の円が描き出されています。画面に単独に描かれた円は、禅における書画のひとつである「円相」を彷彿とさせ、書との結びつきも感じさせます。また、大胆な二色のコントラストは、図と地の緊張感のある関係を印象付け

ているといえるでしょう。吉原治良^{よしはらじろう}（1905～1972）は大阪府生まれ。戦後関西を代表する芸術運動「具体美術協会」（通称「具体」）の創始者です。1960年代半ばから、吉原の代名詞ともいえる絵の中央に円を描く作品を発表し始めました。絵を描き始めて40年以上経過した後に会った画題がこの円であったことは象徴的です。吉原の円は、その形態の簡潔さと裏腹に、彼が描画行為に費やした追求の軌跡を深く物語っているといえるのかもしれませんが。

形の宇宙

山口 長男 《安定する四角》

黒い背景に、赤茶色の色面が集まり、ゆがんだ井げたのような形を成しています。重厚に塗り重ねられた質感は、まるで伝統的な漆塗りを思わせます。大胆な形と禁欲的な色使いが調和し、作品全体に独自の趣味が感じられることでしょう。山口長男^{やまぐちたけお}（1902～1983）は、朝鮮の京城生まれ。1938年に吉原治良^{よしはらじろう}、斉藤義重^{さいとうよししげ}など「二科会」内の前衛的な作家とともに「九室会」を結成し、日本における抽象絵画のパイオニアの一人として活躍しました。1930年代初めから、一貫して抽象画を描いていましたが、1950年代に、黒地に黄土色や赤褐色の幾何学的な形態を厚塗りのマティエールで塗り込めた重厚な作風を確立しました。

描かれた陶器、冷たそう

伊庭 靖子 《Untitled》（3点）

まるでさわれそうな陶器の茶碗。3点いずれも写真のように見えますが、実は油絵具を用いた油彩画です。陶芸家で、鉄釉陶器の重要無形文化財保持者に指定されていた清水卯一^{しみずういち}の作品をモデルに描かれました。対象をリアルに描写しながらも、現実世界とは一線を画した不思議な空間を作り出すことに成功しています。伊庭靖子^{いばやすこ}（1967～）は京都府生まれ。海外での制作を経て、現在は京都を拠点に活動を行っています。

重なった薄氷のよう

清水 卯一 《青瓷茶碗》《青瓷茶碗》《青瓷大鉢》

透き通った水色と、表面のひび模様が印象的です。「青瓷釉」という釉薬により、このような色と質感が生まれます。ひび割れは「貫入」と呼ばれ、陶器が焼かれた後、冷えていく過程で素地と釉薬の収縮率の違いから生まれます。清水卯一（1926-2004）は京都府生まれ。1940年に石黒宗麿に師事し、翌年から国立陶磁器試験場で作陶を学びました。戦後、四耕会、緑陶会、京都陶芸クラブを結成し、1955年から日本工芸会に参加するなど、陶芸家として活躍しました。1970年に京都五条坂から滋賀県湖西地方の蓬萊山の麓に工房を移し、1985年には重要無形文化財保持者に認定されました。

なんともクールな直方体

ドナルド・ジャッド 《無題》

長い青の角柱の下に複数の長さの異なる直方体が断続的に連なっています。下部の直方体の間隔は数列によって決定されています。それゆえ、作者の意図が介在しない普遍的な秩序によって配列されています。こうした作品のスタイルを、作者であるドナルド・ジャッド（1928～1994）は「プログレッション（＝数列）」と呼びました。

ジャッドは、アメリカ、ミズーリ州生まれ。工業素材などを含む様々な素材で、作家の手仕事感を排除した作品を制作しました。ジャッドは、作品がそれ以外の何かを暗示することを徹底的に排除し、作品の持つ意味が作品自体に限定されることを目指しており、彼自身はそれを「スペシフィック・オブジェクト」と定義しました。